られたことをありがたく思うものである。

（野崎清孝）

書評

柴田孝夫著　地割の歴史地理学的研究

歴史地理学研究の主体となすものは古文書・古図などの史料であり、その有無や内容は研究を左右する。しかしながら、近世はともかく、古代・中世の史料はその数量も少く地域的にも限られている。そこで著者は地割を資料としてとりあげ、それに基づいて古代や中世における地域の復原を行ない、さらに近世についても江戸城下町などにそれを試みた。地割に関する歴史地理学的研究といえば、連想されるのは条里制であり、その研究も多数にのぼるが、著者のねらいは条里制そのものではなく、地割を利用しての歴史地理学的研究という立場をとる。したがって本書の内容は、著者の多年に亘る多くの地域的研究の成果をふまえて、地割による歴史地理学的研究の方法を提示しようとするものである。

地割は何処にも何時の時代にもあるものであり、したがって地理学的研究の資料として何処でもとりあげることができる。しかし歴史地理学的研究ということになると、そこには先ず地割の持続性ということが必要条件となる。著者はこの点につき、東大寺領糞置荘や円覚寺領富田荘などの条里、あるいは奈良・京都などの条坊の事例をあげて説く。しかし地割は洪水、河道の変遷などの自然の変化や耕地整理、構造改善事業などの社会事情の変化によって変形をうける。この変形のメカニズムを究明することが、地割の歴史地理学的研究の基本的課題であるということになる。著者は、とくに自然の変化による地割の変形の事例として、まず阿蘇火山の阿蘇谷と南郷谷をとりあげ、極度の火山灰地形である南郷谷の方が侵食が著しく畑地化されて変形が著しく、また八ケ岳西麓の宮川の沖積デルタの条里の変形は洪水や氾濫によるものであろうという。さらに上田・神川扇状地の条里についても復原し、地盤の運動とそれに基づく地形の侵食による変形を認めた。低湿地の福井・東大寺道守荘の事例にもふれ、足羽川の洪水の影響で古い地割が一時放棄され、その後に東大寺の開田が再開発の形で行なわれたものであろう。そして、都市の機能の変化に基づく地割の変化を京都について説明する。

以上の立場のもとに著者は、長年住んだ関東の地割について調査し、まず関東平野の西北部の条里を利根川・荒川などの扇状地につき、洪水による地割の消滅と流水による地割の変形につき述べる。利根川の低地をおおった荒川の扇状地では、条里の遺構が関東地方としてよく残っているのは洪水の害をよく避け得たことによるものであり、そこにみられる変形は持続する流水の作用によるものであるという。関東平野中部の地割の例としては大宮台地とその周辺をとりあげ、利根川氾濫原では水田の耕地割は洪水の頻発によって変形されていると述べ、大宮台地上には方格地割（畑地）が認められ、大宮台地西方の低地には湧水に灌漑用水を得て安定した条里遺構があるという。南部（東京低地）については東京都足立区、台東区、墨田区、江東区、葛飾区、江戸川区などの条里遺構につき論じ、関

東造盆地運動に関した地盤沈下による低湿化や洪水によって変形をうけ、これが町割にも影響を与えているとする。

第八章以下では古代牧の問題にふれ、段丘や扇状地などの平坦地にあった武蔵の牧の周辺には地方の政治の中心に近く条里があったと推定し、畑地にも方格地割が施されたと考える。そして武蔵七党などの武士団成立に論及し、当初は牧の領有に関係して台地の縁辺や段丘上が成立の基盤であり、時代が下るにつれ子孫が低湿地にひろがり、条里水田に経済的実力をえて発展したとする。最後に、江戸城下町の方格地割と会所地の形成につき論じ、条里の遺構との関連につきふれた。そして名古屋の城下町の方格についても、周辺の水田地帯の典型的条里地帯の慣習が城下町の都市地割にも影響していると推定する。今まであまり研究されていなかった関東地方各地の農村や都市を中心とする地割の歴史地理学的分析はまことにユニークで、従来の条里制などの研究とは異なり、いかにも地理学的な方向がうち出されている。地割の、歴史地理学的研究における資料としての意義を強調しその方法を、史料を併わせ駆使しながら、克明な地域的事例を以って示そうとする。しかしそれだけに、多くの問題を提起しているといえよう。とくにその中心となる地割の変形の問題については、自然地理学の知識を基礎に、どのような過程を経て、何故に、どのように変形されるかが十分に究明されねばならず、この点を中心に著者の今後における新しい研究の進展が期待される。一〇五葉にのぼる図版は内容の理解を十分に助けている。

（昭和五〇年三月三〇日古今書院刊、A5二八九頁、三五〇〇円）

（中田栄一）

第七七回例会の報告

第七七回例会は去る六月一九日、千葉商科大学において開催され、左記の発表がありました。

○「みかん作の地域的展開と報徳社との関連性について」　松村祝男君

○「江戸府内における水路の保全」　伊藤好一君

みかん作の地域的展開と報徳社との関連性について

松村祝男

（要旨）

わが国におけるみかん作は、発達過程でいくつかの注目すべき拡大の時期を持っている。例えば、いわゆる旧核心地と呼ばれる地域を中心として拡大がみられた明治期、昭和一六～一七年を中心とした拡大期および広く全国的に新しい産地形成をみた昭和三〇年代以降などである。昭和三〇年代以降の拡大が、いわゆる「果樹ブーム」と呼ばれるほどに広く展開し、これが日本経済の急速な発達との関連の中でなしとげられ、かつ農業基本法に示された自立経営農家育成のための作物の選択的拡大とそれを具体的に遂行する手段としての農業構造改善事業等によって円滑に進められたことは周知の事実であろう。すなわち、この期におけるみかん作の拡大にはそれなりの社会・経済的諸条件の存在を背景としてなしとげられたと考えられよう。